

九州北部域におけるシギ類3種の採食適応

川路則友, 白石 哲(九大・農・動物)

Adaptation for feeding in three species of sandpipers on the northern Kyushu district

NORITOMO KAWAJI, SATOSHI SHIRAISHI

シギ類では種ごとに嘴の形態や体型がかなり異なる。今回は、シギ類3種(ハマシギ, キアシシギおよびソリハシギ)の主に採食方法を通して、それらの採食適応様式的一端を考察した。調査地は九州北部に位置する博多湾の東部地域である。調査方法は直接観察により、peck rate(採食のために1分間に泥表面をつつく回数)とfeeding rate(1分間における餌の摂取量)について調べた。また、シギ類が至近距離にきた場合には餌動物の種を同定した。ハマシギの時間ごとのpeck rateは、採食の開始直後にやや増加するが、そののち一定となり、飛び去る直前に再び増加する傾向を示した。ハマシギの1日における平均peck rateは1月から4月まではほとんど変化しないが、採食時間数は増加した。この傾向は潮高とは関係なく、寒い時期には休息時間を短くして採食時間を長くし、逆に暖くなると休息時間を長くして、摂取エネルギーの調節をしていることが推察された。キアシシギのpeck rateには地域的に差が見られた。また同一地域内でも、泥上での採餌時におけるpeck rateの方が水中でのそれよりも多かった。ソリハシギでも同様に泥上ではpeck rateの方が多かったが、feeding rateは少なく、採食成功率はかなり低いことが知られた。その理由として、泥上では嘴の先端にある感覚器官に頼る触覚採餌法が多く用いられ、水中では主に視覚採餌法をとるためではないかと考えられた。キアシシギの場合には、トゲドロクダムシを食する場合に最もfeeding rateが多く、次いでゴカイ、カニ類の順に少なくなった。効率的には劣るが、ヤマトオサガニがこのシギにかなり好まれていることも推察された。

長崎県青島におけるチョウセンイタチの食性

飯田律子(日本野鳥の会事務局), 白石 哲(九大・農・動物)

Food habits of *Mustela sibirica coreana* (Domaniewski) in Ao-shima Island, Nagasaki Prefecture

RITSUKO IIDA, SATOSHI SHIRAISHI

1978年5月から1979年1月にかけて、長崎県松浦市青島において採取したチョウセンイタチの糞152個を材料に、定性分析によって本種の食物内容物の季節的变化を調べた。

これらのうち動物性食物だけが検出されたものは42.1%、植物性食物だけのものは9.9%、両者ともに認められたものは47.4%であった。動物性食物は哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫類、唇脚類、甲殻類、蛛形類の9綱にわたっていた。年間を通してこの動物性食物が内容物の主体を占めるが、その中でネズミ類の少ない青島では昆虫類の捕食率が極めて高く、最も主要な食物となっていた。主な捕食昆虫は直翅目、鞘翅目、鱗翅目の3目で、時期により現存量が豊富で採食しやすい昆虫類を選ぶものと思われる。昆虫類が減少する秋から冬にかけて、植物性食物の占める割合が増加していることは注目される。10月から1月にかけて多量のオオイタビの種子が糞中から検出された。特に12月と1月は植物質だけで占められる糞が多く認められた。

以上により本種の食性は多様性に富み、特に雑食性の傾向が強いことが明らかとなった。これまでホンドイタチの食性については多くの報告例があり、植物質を採食する例は稀とされている。この雑食性はホンドイタチよりもチョウセンイタチにより強く現われる傾向と思われる。主要な食物が不足し始めると、それに代わる食物を限られた範囲の中から見つけ出し、十分に生存し得る食性の融通性と多様性が、大きな本種の適応力の根源となっていると考えられる。